

『年報人類学研究』の創刊にあたって

人類学研究所長 後藤 明

1950年に人類学・民族学研究所として開設された本研究所も、本年度2010年に発足61周年を迎えました。人間でいえば還暦をすぎた再出発の年、研究所の新たな時代を切り拓くべく新雑誌『年報人類学研究』を創刊します。

南山大学人類学研究所は、アントロポス研究所のW. シュミット神父の意をうけて誕生しました。当初は人類学・民族学研究所と呼ばれ、民族学、考古学、形質人類学、言語学などを総合するわが国でも珍しい総合人類学を追究する研究機関でした。1954年には現在の人類学研究所に改称、そしてその後付設していた人類学陳列室は人類学博物館として独立し、主に考古学研究者は博物館で活動する状況になりました。しかし現在も南山大学文学部人類文化学科には文化人類学と考古学、さらに言語学・哲学の研究者が集い、学生は基本的にこのような関連分野の講義を横断的に受講します。また大学院人類学専攻では、文化人類学、考古学系の科目群に加え、その中間領域として文化資源論という講義科目を設けています。人類学博物館も教育と研究に利用されてきています。このように文化人類学、考古学、博物館学などを横断する教育と研究を推進することが南山大学の特色でもあり、役割でもあると考えます。

この基本理念のもと、南山大学人類学研究所も単なる隣接分野の寄せ集めではなく、総合的に人類社会の成立や変容、また文化の多様性を追究することを目的として研究活動を行う拠点を目指し活動を継続していますが、その重要な柱としてこの年報を創刊いたします。

かつて人類学研究所では『人類学研究所紀要』を1972年から1978年まで合計8巻刊行していましたが、これは所員が成果報告をするものであって外部からの投稿論文を掲載するものではありませんでした。また研究所で活躍されたM. エーデル神父が中心となり英文雑誌*Asian Folklore Studies*を1963年から2007年まで、22巻か66巻まで発行し続け、日本はもとよりアジア研究に関する英文論文を発表する場として大きな貢献をしてきました。この雑誌はもともと*Folklore Studies*として1942年に創刊され、その後*Asian Folklore Studies*となり、さらに現在*Asian Ethnology*として南山宗教文化研究所が編集を担当しています。そして本年報の創刊に伴い1992年からの2009年度まで計18号まで刊行された『人類学研究所通信』は廃止します。

このたび創刊する『年報人類学研究』は、いわゆる学内紀要ではなく、学内外の研究者に広く投稿論文を募集した査読付き論文を掲載することを原則とします。掲載論文の分野も南山大学の特色を活かし、文化人類学と考古学を中心としながら幅広く募集していきたいと思えます。

本創刊号では2010年6月に講演をいただいた神奈川大学特別招聘教授の川田順造先生から玉稿「ヒトの全体像を求めて——身体とモノからの発想」を巻頭にいただくことができました。人類学の原点を多角的に追究してきた川田先生の最新論考こそ創刊号の出発にふさわしいと考えます。

今後、この雑誌が活発な研究発表と議論の場となることを願い創刊のご挨拶といたします。